

伝中院通躬筆『狭衣物語』卷一翻刻(上)

青木祐子 鈴木幹生 勝亦志織 近藤さやか 千野裕子

はじめに

本翻刻は、学習院大学文学部日本語日本文学科蔵、伝中院ふなのいん通躬筆本『狭衣物語』(91337/5004)を翻字したものである。

当該写本は全四巻。今回は巻一の約半分を扱った。書誌等は巻一の翻刻終了時(次号掲載予定)に付す。今回の翻刻の凡例は次の通りである。

一、改行は／で示し、半丁ごとに【】で丁数および表「オ」・裏「ウ」の別を示した。

一、傍記がある場合、その文字の右隣に●を付し、傍記は例のように()で記した。

例 あやしき●(さ)は

一、ミセケチがある場合、その文字の右隣に×を付した。ミセケチのある文字に傍記がある場合は、例のように()で記した。

例 おもへは(と)

一、字形が曖昧で別の翻刻の可能性がある場合、その文字の右側に傍線を付し、例のように(カ)で記した。

例 か(らカ)うあり
一、空白は□で示した。

一、他本との照合の便を考え、内容に応じて小見出しを付した。

一 物語の冒頭―狭衣、源氏の宮のもとを訪れる―

少年の春はおしめともと、まらぬ物なりければ／やよひの廿日あまりにもなりぬ御まへの木たち何／となくあをみわたりて木くらき中になか嶋の藤／は松にとのみおもはず咲か、りて山郭公まち／かほなるに池のみきはの八重山ふきは井手の／わたりにことならずみわたさる、夕はへのおかしさ／をひとりみ給ふもあかねはさふらひわらはのおかしけ／なるして一枝おらせ給ひて源氏の宮の御かたに／もてまいり給へれば御まへには中納言中将など／やうの人ささふらはせ給て宮は御手ならひゑなど／かきささみてうつふさせたまへるに此花の夕はへ／はつねよりもおかしく侍れ春宮のさかりにはかな【一オ】らすみせよと

のたまはするものをとてうちをき給／ふを宮すこしおきあかりてみをこせ給へる御まみ／つらつきなどのうつくしき花のにはひ藤のしなひに／もこよなくまさりてみえたまふをれいのむねふた／かりまさりてつく／とまもられ給に花こそ花の／と、りき給ひて山ふきをてまさくりにし給へる御／手つきのと、もてはやされて世にしらすうつくしけ／なるを人めもしらす我身にひきそへまほしくおほ／さる、そいみしきやくちなしにしもさきそめけんち／きりこそくちおしけれ心のうちいかにくるしかるらんと／のたまへは中納言のきみさるはことのははおほく／侍る物をといふ【1ウ】□□□いかにせんいはぬ色なる花なれば心の中をしる／人そなきと思ひつ、けられ給へとけに人もしらすり／けるたつをたまきのとうちなけかれてもやのはし／らによりぬ給へる御かたちそ猶たくひなくみえ給ふ／によしなしことによりさはかりめてたき御身をむろ／のやしまのけふりならてはとおほしこかる、さまそいと／心くるしきやさるはこのけふりのた、すまるしらせ／たてまつらんこともよひなくいかならんたよりにて／なとおほしわつらふにはあらすた、ふた葉より露は／かりへたつることなくおひたち給ひておやたちをはし／め奉りよその人さみかと春宮もひとついもせと／おほしめしをきたるに我はわれとか、る心のつきそめて【2オ】思ひわひほのめかしてもかひなき物からあはれにおもひ／かはし給へるにおもはすなる心のありけるとおほし／うとまれこそせめと大殿宮なともたくひなき御心／さしといひなからこの御ことはさらはさてもあれとも／よにまかせたまはし世の人のき

、おもはん事もゆか／しけなくけしからすもあるへきかなとさまかうさ／まに世のときなるへき事なればあるましきことに／ふかくおほしとるにしもそあやにくに心はくたけまさり／つ、つゐにいかなるさまにか身をもなしはてんと心／ほそくいまはしめたる事にはあらねとなを世中にさ／らてもありぬへかりけることはあまりよろつすくれた／まへらん女の御あたりにまはまことの御せうとならさらん【2ウ】おとこはいみしうともむつましくこそおふしたてたまふ／ましきわざなりけれ

二 登場人物の紹介—堀川の大殿—

此ころほりかはのおと、とき／こえてくはんはくし給は一條院當帝などのひとつ／きさきのはら二のみこそかしは、きさきもうちつ、／きみかとの御すちにていつかたにつけてもおなし大臣／ときこえさするもいとかたしけなき御身のほとなれと／なのに御つみにかた、人になり給にければこの院の／御ゆいこんのま、にうちかはりみかた、此御心によを／まかせ聞えさせ給ていとあらまほしうめてたき御あり／さまなり二条ほりかはのわたりに四町つきこめて／み門に一たて、つくりみかき給へる玉のうてなに／北のかた三人をそすませ奉り給へる堀川二町には【3オ】やかて御ゆかりはなれす御先帝の御いもうと前の／さいくうおはします洞院にはた、いまのおほきおと、／ときこえさすか御娘一條院のきさきの宮の御おと、／春宮の御をは世のおほえうち／の御ありさまも／はなやかにたのもしけなり坊門には式部卿宮とき／こえし御むすめそ中に心ほそけなる御

ありさまなるへ／けれ女君のよにしらすめてたき一人うみたてまつり給へりけるをうちにまいらせ奉らせ給て此中宮／ときこえさす今上一の宮さへいておはしましける／御いきほひ中／／／すくれてめてたく行すゑたのもし／き御ありさまなり

三 登場人物の紹介―狭衣―

かゝる御中にも齋宮そおやさま／にあつかりきこえさせ給ひにしかはやむことなかつたしけ【3ウ】なきかたも御かほかたち心さまなへてならず思ひき／こえさせ給へる御かたにしもかくすくれてこの世のもの／ともみえ給はぬおとこ君さへた、ひとりものし給をいか／てかはよのつねには思ひきこえさせ給はん千人の中に／たにいとか、らんはおやの御心ちにもいかてかはすくれて／おもほしかしつかさらんとこの比御とし廿にいま／二はかりやたり給はさらん二位中将とそきこゆる／なへての人たにかはかりにては納言にもなり給へき／そかしされと此御ありさまのあまりこの世のものとも／みえ給はぬによるつをおほしをちたるなるへしこれを／たには、宮はちこのやうなる物をとあえかにいま／／／しきまでおほいためれとをしなへての殿上人【4オ】にてましらひ給はんか心くるしさにうちこのうへなどの／せちになさせ給へるなりけり第十六我釈迦牟／尼佛とこの世のひかりのためとけふあらはれ給へると／かたしけなくあやうき物におもひきこえさせ給ひて雨／風のあらしにも月日のひかりのさやかなるにもあたり／給ふをは心たはしくゆ、しき物に思ひ聞え給ひつ、お／ほふはかりの袖いとまなけにあま

りこちたき御心／さしともをおとなひ給ま、にありくるしくおほすおり／／／もあるへし夜などをのつからまされ給よ／／／は／二所なからうちもふさせ給はすうしろめたきことを／なきあかさせ給へとむかひきこえさせ給ひぬれば／思ふま、にもえいさめ聞えさせ給はてた、うちゑみ【4ウ】つ、みたてまつり給へる御けしきともいひしらすあ／はれけなりみくるしくあるまじきことをして給とも／この御心にすこしにてもくるしくおほしめしぬへからん／事はたかへせいし聞え給へきにもあらず露はかりも／あはれをかけ給はん人はいひしらぬしつめなり／とも玉のうてなにはく、まんことをおほしをきつれと／いかなるにか御身のほとよりはいたくしつまりてこの／世はかりそめにあちきなきものとおほしてありてふ人／はしらまほしけふもおほしたらすおほろけならさらん／事に御めをもみ、をもと、め給へうもあらねはすこし／物すさましう心やましき御けしきなるをくちを／しく心もとなき物に思ひきこゆる人もあるへし【5オ】まれ／／／くたりもかきなかし給水くきのなかれを／はめつらしうをきかたき物にかことはかりのゆくての／一言葉をも身にしみておかしくいみしと心をつくし／ましてちかきほと御けはひなとをはちよを一夜に／なさまほしう鳥の音つらきあかつきのわかれにきえ／かへりいりぬるいその中／／なるに心をつくす人さた／かきもくたれるもさま／／／のつからいかてかはなからん／それにつけてもいと、うらみ所なくすさまじさの／みまさり給へかめれといとなへてならぬあたりには／なたらかになさけをみせ給ておりにつけたる花もみ

ち／しも雪あめ風のあらかまきれもしは哀まさり／ぬへきたく
れあかつきのしきのねかきにつけなと【5ウ】思ひかけすを
とつれ給おり／もあるは中／なるいなふ／ちのたきまさり
つ、心をつくし給なめりかしさこそま／めたち給へとた、行す
き給みちのたよにもすこ／しゆへつきたる山かつのかきほの
なてしこにはをのつか／らめとまらぬにしもあらぬほどに野を
なつかしみたひ／ねし給ふわたりもあるにやいかなるおりにか
ほむまう／経にや一見於女人との給へるおほしいつれにかく／
るまのすたれうちおろしつれとそはのひろくあき／たるはゑた
て給はぬなめりかしさたにはいかてかはお／はせざらんおとこ
といふ物はあやしきたに身のほとも／しらす人に心をつくるわ
さなめりかしひかりか、やき／給御かたちはさる物にて御心は
へまことしき御【6オ】さえなとはもろこしにやたくひあらん
此世にはいまも／むかしもたくひなくそものし給ける手などか
き給ふ／さまもいにしへの名たか、りける人々のあととは千とせ
／ふれともかはらぬにみあはせ給ふに人々なを時にし／たかふ
わさにやいまめかしうたをやかになまめかしう／うつくしきさ
まにはかきまし給へりとそさためられ／給める又ことふえの音
につけても雲ををひ、か／し此世のほかまですみのほりあめつ
ちをもうこかし／給つへきをゆ、しうおやたちもおほしきはき
てなに／事をもあなちのこのみせさせ奉り給はねはわれ／も
ことに心をと、めて人のに耳ならさせ給はすなと／あれはよろ
つにむしんに物すさまじき人さまに【6ウ】やとそをしはから
れ給へとはかなき御言の葉け／しきなとみ奉るより我身のうれ

へもわすられ物／思ひはる、心ちしてうちまれあいきやうつ
き給へる／御さまそたくひなかりけるすてなに事もいひつ、
／くれは中／なりよろつめつらしくためしなき御／ありさま
と世の人のことくさにきこえさすめれば大／殿などはあまりゆ
、しくあめわかみこのあまくたり／給へるにやけふやあまのは
衣もむかへ聞え給はんとあ／やうくしつ心なき御心の中ともな
り

四 登場人物の紹介—源氏の宮—

源氏宮とき／こゆるは故先帝の御すへの世に中納言のみやす／
所の御はらにたくひなくうつくしき女宮のうま／れ給へりしを
いまさらのほたしと心くるしうおほし【7オ】はく、みし程に
宮の三はかりになり給しほとに院も／みやす所もうちつ、きか
くれさせ給にしかはいと心くる／しくて齋宮やかてむかへとり
聞えさせ給ひて中将の／おなしことに思ひきこえさせ給殿もま
ことの御むすめ／よりもやんことなきかたそひて思ひかしつき
聞えさせ／給へり十に四五あまらせ給へる御かたち有さま奉
／らん人はいかなるもの、ふなりともやはらく心はかなら／す
つきぬへきを中将の御心のうちはことほりそかし／

五 登場人物の紹介—狭衣と源氏の宮—

しはしはざりともなぞらへなる人ありなむとたのもし／くおほ
され給ひしをかのよしかたかかくれみのをえ給／はねともをの
つからたかきもいやしきもたつねより／つ、いた、のはしはく

つるれといとけちかきほとに【7ウ】こそあらねたちき、かいまみなどかしく御心にいり／たるま、におほつかなきはすくなければ此御かたちあり／さまになすらふはかりのはありかたきわさにこそと／おほざる、ま、にいと、人しれぬ心の中に思ひこかれ／給さまいといとをしうとなしのたきとやつるになり／給はんとみゆるをさすかにかくしのひまきはし給ほと／にはれ／しからすむすほ、れ給へる御けしきをおと／なひ給ま、に人の御くせにこそとしのふもちすりを／ゑしり給はぬなるへしおほきおと、の御かたにはいかに／かやうの人おはせてつれ／くにおほざる、ま、にざるへか／らん人の御むすめかなあつかりてかしつきたてんなど／あけくれざるはうらやみ給める源氏宮の御かたちかく【8オ】すくれ給へる御名たかくて春宮のいとゆかしう／思ひきこえさせ給へるにさこそつるのことならめと／おほしたるうちうへもむかしの御遺言おほしわす／れすあはれに聞えかはさせ給なからおほつかなくて／すきさせ給もくちをしきをさやうにてうちすみ／もしたまへかしとおと、にも聞えおとろかさせ給／けりされといと、しき御ありさまをなをいまず／こしざかりにねひと、のひ給てこそなどはおほる／けならずおほしをきつる御いそきなめり

六 五月四日、あやめ売りを見る狭衣

かくいふ／ほとに卯月もすきて五月四日にもなりにけり／夕つかた中将君うちよりまかて給ふみちすから／み給へはあやめひきさげしつのおかひまくだちかひ【8ウ】もてあつかふさまと

もけにいかはかりふか、りけるとを／ちの里の恋草ならんとみゆるあしもとものいみ／しけなるもしらすかほにいとおほくもたるもいかに／くるしからんとめとまり給ひて／□□□うきしつみねのみなかる、あやめ草か、る恋ち／と人もしらぬにとそいはれ給玉のうてな軒はに／かけてみ給はおかしのみそおほざる、を御車のさき／にかほなともみえぬまでうちむれてゆきやらぬを／おとろ／しき御すいしんのかゑ／にと、められ／て身のならんやうもしらすか、まりあるをみ給ひて／さはかりくるしけなる物をかくいふとせいせさせ給へは／ならひにてさふらへはさはかりの物はなしかはくるしと【9オ】思ひさふらはんと申を恋ちは我御身にならひ給へ／は心うくもいふかなとき、給ふおほきなるもちいさき／もつまことにふきさくをくるまよりすこしのそ／きつ、みすき給にいひしらすちいさき●(く)あやしき／いゑともにもた、一すちつ、をきわたすを何の人／まねすらんとあはれにみ給つ、あふきをふえに吹／給へる夕はえの御かたちまことにひかるやうなるをは／しとみにあつまりてみ奉りめつる人さありけり／御くるまなといまはおとなしくなり給へれと御とも／のすいしんなどはわかうおかしけになへてならず／みゆるをあれか身にてたにあらはや何事を思ふ／らんとわかき人はめてまとひてすき給ふもなを【9ウ】あかねは軒のあやめ一すちひきおとしていそきかきて／はしたもの、おかしけなるしてをひて奉るくれて／はしる御すいしんにとらせてかへるをいつこよりとか／申さんやかて御車にまゐり給へととらへつ御らん／すれば／□□□しらぬまのあ

やめはそれとみえずともよもきか／もとはすきずもあらなむと
そかきたるいかなるす／きものならんとほゝゑみてとはせ給へ
といはんやは／心ときみすいしんそのわたりにすゝりもとめて
た／てまつりたるしてたゝうかみにかたかんなにて／□□□み
もわかすすきにけるかなをしなへて軒の／あやめのひましなけ
れはいまわざとまいらせんといは【10オ】せ給ひてわらはのい
らん所たしかにみよとのたまへは／はしとみたかくあけわたし
て人々あまたみえ侍つと申／せはなに人ならんみしりたりつる
にやとはかりはおほせ／とかやうのうちつけしやうなどはわ
さど御心にいら／すあるましきことをそいかなるおりにも御心
にとゝめ／給へかめる

七 五月五日―宣耀殿や一条院女一の宮への消息―

又の日は所々に御文かき給色々のかみ／の色はたへなとえなら
ぬあまたとりちらしてすみこ／まやかにをしすりつゝ、かき給御
手はけになとてかす／こし物の心しらん人のいたつらにかへさ
んとみゆるに／御うたともそなへての人のくちつきにてたにお
かし／ともみえぬはあしう人のまねひためるにや左大将の／御
むすめ宣耀殿と聞えて春宮にいみしうとき【10ウ】めき給をい
かなる風のたよりにかほのかに見聞えさせ／給けりされといか
てか思ふさまにしもあらん御せうそ／こなとおほるけならてか
よふ事かたくそありける／あまりまちとをなるも恋しく思ひい
てられ給ひて／□□□恋わたるたもといつもかはかぬにけふ
はあやめの／ねさへなかれて一条院のひめ宮の御けはひもほの

か／なりしかはにやなへてならぬ心ちせしをいかて御かたち
なとようみ奉らんなど心にかゝり給て少将のみやう／ふのもと
にれいこのまやかにて中に／□□□おもひつゝ、いわかきぬまの
あやめ草みこもり／なからくちはてねとやなどやうにてあまた
あめれと／おなしすちなれはとゝめつかやうのおりにつけたる
【11オ】言の葉などはちらし給へと心のうちはいつまでかとの
み／この世はかりそめに物すさまじくおほざるへき丁子に／く
るむまでそゝきたる御ひとへにくれなるの御はか／まき給ひて
つらつえつきていけのあやめの心ちよけに／しけりたるをなか
めやり給てをとほの山にはなとくち／すさみ給へる御こゑはな
をたくひなしありつる御／返いづれもおかしき中にせんよう殿
のは御手も心／ことにおかしげにて／□□□うきにのみしつむ
みくつとなりはて、けふは／あやめのねたになかれますとあるけ
しきなどむかひき／こえたる心ちしてらうたけにあはれあさか
らねはず／こし涙くまれ給ひぬ

八 五月五日夜、狭衣と両親の会話

その夕ざりはもしざりぬへき【11ウ】ひまもやとうちわたりに
いて立たまふにいとゝめし／さへあれはまいり給とてまつ殿の
御まへにまいり給／へれはけふはまた見奉り給はざりつればに
やめつらし／きにほひそひ給へる心ちしてうちゑみてそつく
く／と／まもられさせ給ふうちよりめしさふらへはまいり侍を
／中宮の御かたに御せうそこやと申給へはれいならぬ／さまに
き奉りつればまいらんとしつるを風にやくこゝに／もなやましう

暮し侍ぬるつとめての程にためらひ／てまいらんあつきほとは
しはしいてさせ給てもやす／ませ給へかしと思ふをれの御い
とまやありかたか／らんなどそ聞えさせ給へは御いらへしてた
ち給ぬまた／しきにあつさ所せきとしかななにしにつねに【12
オ】めすらんとつふやき給ふをは、宮き、給てくるしく／おほ
え給は、なにかはまいり給ふうちになとせさせて／ものし給へ
かしと心くるしけにみやり聞え給ふさうかんの／くれなるのひ
と／おなし御なをしのいとこきながら／なてしこのふせんれう
さしぬきき給へるやうたい／こしつきさしぬきのすそまでたを
く／とあてにな／まめかしうきない給へりもの、色あひなとな
へての／おなしものともみえぬをなとかうあまりゆ、しう／お
ひなり給ふらんとて涙を一めうけてせちに見／をくらせ給へる
を御前なる人さことはりなりとあ／はれにみ奉る

九 宮中での管絃—嵯峨帝、若上達部に演奏を求める—

うちにはわさと節會などもなき／よのつれ／におほさる、に
はあま雲さへたち【12ウ】わたりて物むつかしきなくさめに春
宮わたらせ／給ひて御物かたりなど有なりける御前のひろ／ひ
さしにおほきおと、の権中納言左兵衛督左大将／の御子の宰相
の中將などやうのわかかந்தちめあま／たさふらひ給ふに源中
將のまいり給はぬはいと、し／き五月雨の空のひかりなき心ち
せさせ給てめすな／りけりこよひの宴にはさふらふかりの
人／の／さえをてのかきりおしまて一つ、心みんと給す／るを
春宮も興あること、の給はせてさま／の御／こととも奉り

わたす権中納言にひわ兵衛督／にしやうのこと宰相中將わこん
中務宮の少將／しやうのふえ源中將によこ笛給はすた、いまの
【13オ】いみしき物の上すともなるへしをの／こよひこのね
／とも手をつくしてきかせよとの給はするをたれも／ひとつに
かきませてこそあやしさままきはして／つかうまつらめいと
わりなきわさかなとつかうまつ／りにく、わひたまふ中にも中
將はよろつのこと／よりもさらにたはふれにもまねひ侍らぬも
のをと／奏し給ふをた、そのしらざらんことをこよひはし／む
へきなりとの給はすればをしふる人たに侍らはた／とるたどる
もつかうまつるへきをの／てをつくし／給はん中にたとく
しうはしめ侍らんはけにたくひ／なき世のためしにやなり侍ら
んとてこのほかに手／もふれ給はねはいとかはかりの心はへ
とはおもはずこそ【13ウ】ありつれことのほかにこそ有けれと
しころおと、の思／ひたるもおとらすこそ思へかはかりのこと
をたにいふま／まならざりければまいてよろつをしはかられぬ
よし／くいはしとまめた、せ給にいとわひしうてかしこ／ま
りてとりよせ給てものにませつ、をのつから／かたのやうにま
ねひさふらひなむひとりはいとわり／なきわさかなとなやめる
けしきのおかしさにて／うらみはてさせ給へくもあらず御覽し
けること／人さも中／心ことなるへき夜の御あそひと心／つ
くろひしつ、とみにももふれ給はて中將の四／五のさえはか
りたに侍らぬもの、ねをまきれなく／ひきあらはし侍らんおも
てはつかしきさよよろつ【14オ】の人のかはりにことをかへつ、
つかうまつらせはやと権中納／言奏し給へはひとつをたにさは

かり心こはからんにま／いて人のかはりはずへくもあらさめり
とてせめさせ給へは／をの／心つくろひいたくしてひきいて
たるもの、／ねともいとおもしろし

十 宮中での管絃—狭衣、笛を吹く—

中将の御笛になりてさて／いかにつかうまつるましきかとたひ
／／まめやかなる／御けしきにてせめさせ給へいとわひしく
かうとし／らましかはまいらさらまし物をとくやしけれとのか
／／へきかたなくて笛もうぬ／しけにとりなして／ことに人
のき、しらぬてうし一はかりふきならし給へる／をうへはをと
にはき、つれといとかくまてはおほしめささり／つるをいま、
てみ、ならさ、りけるうらめしさをさへひき【14ウ】かへしお
ほせられてめておとろかせ給さまいとこちたし／きくかきりの
人さもさらにこの世のもの、ねともき／こえず涙もと、めかた
けれと中／／なるほどにてやみ／ぬるをいとあるましき事とせ
めの給はすれとた、／かはかりなむおと、のたはふれにをしへ
侍てこれよりほ／かにはすへておほえさふらはすとそうし給を
いとう／たてそらことをさへつき／しうもいふかなおと／と
の笛の音にるへうもあらさめりすへてかくく／るしとおもは
れはさらにいはいしとおほせらるれはいと／わひしうて皇太后宮
のひめ宮たちなどのうへの／御つほねにおはしますころにて心
にくきあたり／／なに事ものこりなくきかれ奉らしと思ふかた
【15オ】さへいと、しきなるへし月もとう入て御まへのとうろ
／のひとものひるのやうなるほかけにかたちはいと、ひか／り

まさりてはしらによりぬてまめやかにわふ／／吹いて給へる
笛の音雲をひ、かし給へるにみかとを／はしめ奉りて九重の
うちのしつのおまでき、おと／ろきなみたおとさぬはなしさみ
たれの空の物むつかし／けなるにもの、みいれ奉らんとゆ、し
くあはれに／たれも御覧するにおと、まいり見給は、いかはか
り／いま／しきまておほさむと我心ちにもおとらせ給／はす
御袖もしほるはかりにならせ給ぬ

十一 宮中での管絃—天稚御子降臨—

よひすくるま、／に空のはたてまでひ、きのほる心ちするにい
なつ／またひ／／して雲のた、すまぬれいならぬを神【15ウ】
のなるへきにやとみる程に空いたくはれてほしの／ひかり月に
ことならずか、やきわたりつ、此御笛の音／のおなしこゑにさ
ま／／のもの、音とも空にきこえ／てかくのをといとおもしろ
しみかと春宮をはしめ／奉りていかなることそとあさみさはか
せ給に中将の／君物心ほそくなり給ひていと、ねのかきりふき
す／まし給へり／□□いなつまのひかりにゆかんあまのはら
はる／かにわたせ雲のかけはしとねのかきりふき給へるは／け
に月の宮この人もいかてかはおとろかさらんと／おほゆるにか
くのこゑ／／いと、ちかうなりてむらさき／の雲のたなひきわ
たるとみゆるにひんつらゆひて【16オ】いひしらすおかしけな
りくるま、にいとゆふかなにそと／みゆるうすき衣を中将君に
うちかけて袖をひき／給ふに我もいみしう物心ほそくてたちと

まるへき心ち／もせずかくめてたき御ありさまのひきはなれか

たく／て笛をふく／さそはれぬへきけしきなるにみかと／の御心さはかせ給ふて世の人のことくさにこの世の物／にはあらず天人のあまくたれるならんとのみいひ思ひ／たるはけにこそはありけれおと、のかやうのことをたま／さかにせさせす月日の光にもあてしとあやうく／いま／しきものに思ひたる物を此人をかくめにみす／雲のはたてにまよはしては我御身もこの世に【16ウ】すくさせ給へき御心ちせさせ給はねは涙もえと、め／させ給はすいといみしき御けしきにてひきと、め／させ給をかなくみ奉り給にもましておと、母みや／など聞給はんことをおほしいつるにいとほしくおほさる、／この世なれとふりすてかたきにか、る御むかへのかた／しけなさにひとへに思ひたてとみかとの袖をひかへて／おしみかなし給おやたちのかつみるをたにあかすう／しろめたうおほしたるをゆくゑなくき、なし給ひて／むなしき空をかたみとなかめ給はんさまのかなしき／に此たひの御ともにまいるましきよしをいひしら／すかなしくおもしろく文をつくり笛をもちなか／らすこし涙くみ給へる御かほは天人のならひ【17オ】給へるにもほひあいきやうこよなくまさりてめて／たき御こゑしてすんし給へるにあめわかみこ涙を／なかし給ひてかくなに事にもこの世にくれたる／によりさそひつれとことほりにめてたくかなしき文／の心はへによりと、めつるくちおしさをつくりかはして／雲のこしよせてのり給ぬるなこりのにほひはかり／とまりて空のけしきもかはりぬるをあさましなと／もよのつねのことをこそ

いへめつらかなりとみるかきり／は夢の心ちし給けり

十二 宮中での管絃—嵯峨帝、女二の宮降嫁を考える—

中将の君は御この御ありさま／のおもかけ恋しくていみしう物あはれと思ひたる／さまにて空をつく／となかめ入たるけしきいと、／此世に心と、めすやなりなむとあやうくうしろ【17ウ】めたくおほしめされて何事に心をすこしまきは／さんとおほしまはすに大臣になすとうれしと思はし／おと、もさらにうけひかしくかひなくおほしめさる皇大／后宮の御女二宮の御かたち心はせことほりもすき／ておほしますをいみしうかなしき物にしたてまつら／せ給けり一宮は此比齋院にておほしますきさきも／この宮をはたくひなく思ひかしく聞きさせ給てよの／つねの御ありさまなどおほしかく／へくもなきを中将／の笛の音に天人たにき、すくし給はておりおはし／てさそひ給へるにた、にてやませ給はんもあるま／しきことなるにそへてかくいと心ほそけに思ひあく／かれぬへきけしきなるに二の宮のこのころさかり【18オ】にと、のひ給へる御ありさまみ奉らはこの世はえあく／かれしとおほしめしなりぬ

十三 動揺する堀川の大殿、内裏へ

大殿には中将君はこよひ／はいて給ましきにやなとたつねさせ給ほとにくら人／所のかたに人こゑたかく物いふを何事ならんと／きかせ給にいよのかみなにかしの朝臣まいりてうちにかう／の事なんざふらふなると申を聞給御心ちとも／いかは

かりかはありけんさらにうつ、のこととおほされ／ねはぬ給へりつらんあとをたにいま一たひみんとの／給事よりほかに物もおほえ給はぬをみ給ふに母宮は／た、御そひきかづきてそふし給へる世はいかになり／ぬるそとみゆるまで殿のうぢさはきたりみちの程／おほしつゝくるもいみしくゆゝしきに御車のうち【18ウ】よりなかれいつる御なみたちくまの川わたり給ける／にやとみえたり道のほとれいよりもとをくおほされ／て陣のほと人にひかれ給に九重のうち物は物さか／しけもなし火たきやの火ともつねよりはあかく／こ、かしこのはさまへいのつらく／などにいふこゑ／た、此事なるへしと聞給にさてまことに雲にのほり給ぬるにやいかにいふそとおほすに心ちいと、ま／とひてたふれぬへし

十四 嵯峨帝、女二の宮降嫁を提案

殿まいらせ給と人々たちさはく／を中将この事によりてならんかしいかはかり御心ちま／とはし給ひつらんとおほすもいとおしうて殿上のか／ちにさしいて給るをおはしましけりとうちみつげ／給へるそ中／いみじきやいかなりつることそをのれ【19オ】をすて、いつこへおはせんとし給へるそともえいひやら／すおほ、れ給をけにとまらず成なましかはかきり／ある御命もいか、なり給はましとあはれにみ奉り給／ためらひて御前にまいり給へはありつることとも／かたらせ給にすへてうつ、ともおほされす何事も／いひしらせをしふることも侍らすおほやけにつかう／まつりわたくしの身のためおとこのむけにむさ

いに／侍るはいとくちおしきことに侍れはのかたはかりは／かたのやうに見あかせとやいひしらせ侍けんまいて／このことふえのかたはたはふれにてもまねひさふ／らんとこそは思ひ給へ侍らざりつれいかにしてかく世の／ためしになりぬへきねをさへふきつたへはへり【19ウ】けるにかとめつらかにも思ひ給へらる、かないかにも／又たくひもさふらはねはた、心におとろくことなく／ていきて侍らんかきりみ給へらんのみこそこの世の／よろこひはさふらふへきにいとあまりなる身のさ／えなとはさらうれしうも侍らすつゐにいかなる／みたり心ちをまとはさせ侍へきにかとかへりてはいと／つらくなむ思ひ給へらる、とこよひはすへてうつし／心も侍らすむなしきあとをみ給つけたらましかはあ／すまでなからへて大やけにもつかうまつりわたくし／のあまたのほたしとも、見給へざらましをかはらぬさま／をみさせ給へること、よろこひ申給つ、あやうくう／しろめたしとみやり給へるけしきのことほりにいと、【20オ】こよひよりは見え給へは人々もみななき給ぬ中将／君はかういとこちたき御あそひのなこり物むつ／かしうあやまちさへしたる心ちしてさふらひ給ふを／うへめしよせて御さかつき給はするとて／□□□みのしろも我ぬき、せん返しつと思ひなわ／ひそあまのは衣とおほせらる、けしきさにやと／心うることあれといてやむさしの、夜のころもなら／ましかはけにかへまさりにもやおほえましと思ひく／まなき心ちすれといたうかしこまりて／□□□むらさきのみのしろ衣それならはをとめの／袖にまさりこそせめといはれぬるをなにかき、／わかせ給は

んいつれもむかひのをかははなれぬ御中【20ウ】ともなれはつねよりも物あはれなるけしきにてしつまりまさり給へるよういかたちなどおほろけの女は御門の御むすめなりともならへにくきを二宮はけしうはおはせしとおほしめすなく一こゑに／＼あくる心ちすれば人さままで給殿も中將の君ひ／＼とつ御車にていて給ぬ

十五 独詠「夜半の狭衣」

は、宮まぢうけ給へる／＼けしき思ひやるへしいかにこうし給ひぬらんとて御手つかからまかなひすへてそ、のかし給へとまこと／＼くるしくなやましうおほされてこよひはいかにも／＼ふようにさふらふとてやすみ侍らんとて我御かたへ／＼わたり給ふをいと、こよひよりはかた時たちはなれ給はんもうしろめたうわりなしとおほしたるけしき【21オ】にてこよひはこなたにもし給へとせちに聞え給へはおましなとしかせてね給ひぬるやうなれとめ／＼つらかなりつること、ものみ思ひつ、けられてまどろ／＼まれ給はずなにとなく心もまことにうかひてありつる／＼みこの御かたちもおもかけに恋しくくちおしう／＼おほえ給けに殿の給へるやうにこの世にはあり／＼はつましきはしめにやと我なから心ほそしこわたの僧都めしよせてこの御かたはらにさふらはせ給ひて殿もいもね給はずこよひの事ともかたり給つ、いと／＼ものゆ、しくおほしてあすよりはしむへき御いのり／＼とものことなどの給はすざるへきけいしきしと／＼もめしあつめてやんことなくしるしあるへき人として【21ウ】

はしめおこなはせ給へき御いのりのさまいとこちた／＼けにおほしをきての給はするさまき、給てもなど／＼かうしもおほすらんか、る御心ともをしらすかほあち／＼きなくさるましきことにより身はいか、しなさんと／＼おほゆるに人やりならず枕もうきぬへしあるまし／＼きこと、返さ思ひかへせとあけくれさしむかひ聞えた／＼れはにやわきかへる心のうちにはさらに思ひやむへき心／＼ちもせずへのいみしき御心さしとおほしめして給は／＼せつる御みのしろはかたしけなくおもた、しけれと／＼かひ／＼しうきかまほしうもおほされすむらさき／＼のならましかはとおほえて／＼□□□色／＼にかさねてはきし人しれす思ひそめ【22オ】てし夜半のさ衣とそかへす／＼いはれ給

十六 翌朝、狭衣を案じる両親

ねぬに明ぬ／＼といひをきけん人もうらやましきにからうしてあけ／＼ぬる心ちすればひんかしのわた殿のつま戸をしあげ／＼給へれば雨すこしふりけるなこりあやめのしつく所せ／＼けれと空は雨雲はれわたりてほの／＼あけつ（行力）山／＼きは春の明ほのならねとおかしきに花たちはな／＼にやとかりけるにやほと、きすのほのかになきわた／＼るねにあらはれにけりと、給／＼□□□夜もすかなけきあかして郭公なく音を／＼たにもきく人そなきなとひとりこちてた、すみ／＼給ま、に身色如金山端嚴甚微妙とゆる、かに／＼うちあけてよみ給へるいみしく心ほそくたうときを【22ウ】母宮おと、なとき、給ひてなをさま／＼にあま／＼なるありさまかな、とかうしもおひいてけん又天人／＼のむか

へもこそし給へとゆ、しうおほされて宮みさ／りいて給てなとかく夜ふかくおき給へる五月の空に／はおそろしきもの、あなる物をとの給ま、にはなこゑ／になり給ひぬ也殿もおき給ひて猶此ころはかり／うちにもなままり給そけふより七日はかりとはしめ／さするいのりとも程はおなし心に佛をもねん／し給てもものし給へと聞え給にたはふれのくちすさひ／もちちたうむつかしうさへおほさるれはいつちかまかり／いてんと申給てたいへわたり給ぬその比のことくさ／にはた、このことをあめのしたにいひの、しりけり【23オ】大やけにも日記の御からひつあけさせ給てあめ／わかみことつくりかはし給へる文ともかきをかせ給／けりその夜さふらはさりける道のはかせともたかき／もいやしきも此御文を見てなみたをなかしつ、め／てまどふをこの比のことにはしたり

十七 源氏の宮への告白―在五中将の日記―

あつさのわりな／きは水こひ鳥にもおとらす心ひとつにこかれ給を／しる人なしひるつかた源氏宮の御かたにまいる／給へれはしろきうすもの、ひとへき給ていとあかさ／かみなる文をみ給御いろはひとへよりもしろうす／き給へるにひたひのかみゆら／くとこほれか、り／給へるすそはやかてうしろとひとしうひかれいきて／こちたうた、なはりたるすそのそきすゑいくとせ【23ウ】かきりにおひゆかんとすらん所せけなるものから／たを／とあてになまめかしうみえ給かくれなき御／ひとへに御くしのひま／より見えたる御こしつき／かひななどのうつ

くしさに人も似給はねはあまり思／ひしみにけんわかめからにやとまもられてむねは／つふ／となりさはけとよくしのひかへしてつれなく／もてなし給へりいとあつき程にはいかなる御文御／覽ぞ(すか)と聞え給へは齋院よりゑとも給はせたとて／くまなき日のけしきにはなく／とにほひみち給へ／る御かほつきをまはゆけにおほしてすこしうちあ／かみて此御文にまきはし給へるよういけしきま／みなどいひつくすへくもあらずめてたく見え給に【24オ】なみたさへおちぬへうおほえ給まきはしにこのゑとも／をみ給へはさい五中将の日記をいとめてたうかき／たるなりけりとみるにあいなうひとつ心なる心／ちしてめと、まる所／おほかるにえしのひ給はて／こはいか、御らんするとてさしよせ給ふま、に／□□よしさらはむかしのあとをたつねみよ我のみ／まよふ恋のみちかはともいひやらす涙のほろ／とこ／ほる、をたにあやしとおほすに御手をさへとらへて／袖のしからみせきやらぬけしきなるに宮いとあさ／ましうおそろしうなり給てやかてとらへ給へる御かひ／ないうつふし／給ぬるけしきのいひしらぬものに／とらへられたらんやうにおほしたるもいと、心さは【24ウ】きしてこ、ら思ひつむる心のうちをかたはしたにも／うちいつへくもなう涙にのみおほ、れ給へり

十八 源氏の宮への告白―室の八鳥―

いはけ／なう侍しより心ざしことに思ひそめ奉りてこ、らの／年ころつもりぬる心のうちはあまりしらせ奉らて／やみなんも

たれも後の世のためまでうしろめたう／侍へきによりもらし侍ぬるこそあさましけれ又いと／かくあるまじうみくるしき物思ふ人のたくひむかし／も侍けるにやとみゆるにあまりうとましけにおほし／たるも心うくこそ／□□かはかりにおもひこかれて年ふやとむろのや／しまのけふりにもとへかたはしたにもらしそめつれ／は年をへて思ひこかれてすこし給へる心のうち【25才】を聞えしらせ奉り給におそろしき夢をみる心ち／し給ひてわな、かれ給をむけに御覽ししらすらん／人のやうにかはかりをたにおそろしとおほしたる事と／なく／うらみ聞え給ほとに人ちかうまいるけしき／なれはすこしのきていまよりはいかにくませ給はん／なにはかならん御心かはりは中／人めあやしく侍らん／おほしうとむなよいはきりとをし侍ともをとき、／もあるましきこと、思ひしりたれはよもみくるしき／心の程は御らんせられしあまりに思ひわひ侍なはか／よはぬ里にそ行かくれ侍らんかしさやうならんおりは／さそかしとおほしめしいてさせ給へかしてなむなど／きこえしらせ給事も思ひやるへしされといとちかく【25ウ】しもさふらはぬ人はいつもけちかき御なからひに／めもた、ぬならんかしゑみ侍らんとて人さちかく／まいれは宮は御心ちれいならぬとまきはしてちい／きみ木丁ひきなをしてふさせ給ぬれば君も／かほのけしきやしるからんとおほせはたち給ぬるに／宮は今そよるつにおほしつ、くるか、る心おほしける／人を露しらてたれよりもなつかしう思ひてあけく／れさしむかひてすこしけるよとうとましうおそろしき／にもさるへき人々の御あたりならておひいて

けるを／あはれにおほししられてやかてふしくらし給へるを御／めのとたちなとれいならぬ御けしきはいかなること／とそとあやしかるもたれもか、る御心をもしらぬに【26才】かやうにつねにあらははつかしもあるへきかなとおほすに／ありてうき世はとけふそおほししられける

十九 堀川の大殿 狭衣と源氏の宮入内について語る

中将の君も／こといそめてのちはいと、しのひかたき心のみみた／れまさりてつく／となかめふし給へるに殿の御かた／よりまいり給へとあれは何となく心ちのなやましき／にもうけれとさき、給は、又おとろさきはき／給はんもき、にくければさうそくしとけにてまいり／給へりひんのわたりもいたううちとけてないかしるな／る御うちとけすかたのうるはしきよりも中／又かく／てこそみ奉るへかりけれとみえてみまほしうなつかし／きさまそし給ふをれいのうちゑまれて見奉り給／よさり中宮のいて給はんにまいり給へうちも一日【26ウ】あまりとりこめたりとおほせられきとの給て源氏／の宮の御事を春宮のかく心もとなからせ給にいたく／わひさせ奉るとうらみさせ給にす、しうなりてさも／やとおもひたつを右のおほい殿のた、ひとりかしか／るらん女の十にたにたはと心もとなからるからうし／てこの八月にまいらせんとけしきとらる、をせいす／へきにもあらずきしろひ給はんもひんなければ冬／つかたさらすはとしかへりてなど思ふはいか、あるへからん／春宮もいそかせ給うちにもさこそあらめと御け／しきあれとなにかは

人のいつしかと思ひいそかれん／をと、めんもいとほしかるへ
しなど聞えあはれ給をつゝることそかしさこそあらめと思ひ
なからもむねはふた【27オ】かりまさりてけしきもかはるらん
思へはつれなくもて／なして人のことをのへさせ給はんはいと
おかし(し力)くや侍らん／この御事はいつも心のとかにあえ
侍なん権申納言の／身にそふかけてさはくなればわつらはし
さにかくいそ／かる、とそ聞侍と申給へはこ、にもさ思ふなり
右／のおと、の秘すらんむすめこの御かたにえこそならは／さ
らめそんなうたちはなたかにきら／しきさま／にやあらんと
そをしはかる、や母めのとよりほかに／あたりにもよせずきは
もなくこそかしつくなれみつ／からくゆるみやはらの女のやう
にやあらんとそわらひ／給へるかの思ひかけさりしよひのほか
けはいとしも／たまのきすは見えざりしかとはなたかはよくい
ひあ【27ウ】て給へりと思ふにすこしほ、ゑまれぬるけしきを
／しるくみ給ひてわか、りし時はかいまみをつねにせし／かは
さもさま／なる人をあまたみしかなはいと／ありかたき物
そかし思ふさまなる人にあふ事はかたき／わさなりやこ院の事
はいみしくおほしめしなからこのかた／はあやにくにせいしさ
いなみてたやすくもありかせ／給はざりしかとかしこうぬすま
れいて、いたらぬくま／こそなかりしかかくさま／にえさら
ぬ人あまたもの／し給にをしけたれてあはれと思ひしわたりも
あり／しかとかひなくこそやみにしかなとむかしのことともお
／ほしいてたり

二十 堀川の大殿の訓戒と堀川の上の心配

わかくより猶やんことなきかたにさた／まりぬるはをもちかに
よき事なり一人あるはをの【28オ】つからさもあらぬ心もあく
かれてかる／しくわろ／きとそなどの給ひてかの御けしきあ
りしふえのろ／くはいとかたしけなきことにこそその、ちうち
／／にも／あんない聞えさせぬはいとひんなき事なりよき日／
して侍従の内侍のもとにほのかし給へかしなどの／給へはあ
なむつかしやありはつへくもおほえぬ世にさやう／にさたまり
ゐていかにわひしからんときくにさへそ／あつかはしき夜のこ
ろもなりける御けしきかたし／けなかりきといひなからさはか
りの御ことをうけ給て／聞えさせいてんや中／なさけに侍ら
んとてすさまし／けなるけしきなれは心にいらぬことなめりと
おほす／もうへのおほさんこととおしくてたちまちにこそ
【28ウ】いはれさらめさの給はせんをしらすかほならんはひ
かひかしかるへきわさかなとれいならすものしけな／る御けし
きなれはわつらはしくてたち給ぬ／□□□ほかさまにもしほの
けふりなひかめやうら風／あらくなみはよすともなといなふち
にくちすさみ／給ては、宮の御まへにまいり給へればあつけに
や／この比こそいたうやせて見え給へとて心くるしけに／おほ
したるけしきあくまでらうたけに見え給を殿／のさはかりくま
なく見あつめ給ひけんにおやと聞えな／からもすくれたる御お
ほえことはりそかしとみ奉り／給夏やせはえせぬ物のことにと
かやかたへす、しき／風にしたかはんもあしかるへきことかは

などかくしも【29才】いひそめけんわたしもりにやとはましとて多み給へる／にほひさとこほる、心ちし給へるをめつらしからん人の／やうにわかき人さみたて奉る申務といふ人みちの／はてなるとなけし人のありしこそことはりに／からねとひとりこつをしりめに見をこせ給て／いかにとかやのこりゆかしきひとりことかなとの給を／あなわひし聞えにけるにやとわふるさまもにくからず／みわたし給殿の女二の宮に御文たてまつれとの／給へるこそた、さはかりのなをさりことたに大宮聞給てめさましくあるまじき事とむつかり給ける物を／さやうにほのめかしいて、はしためられ奉らんこそた、／なるよりは心やましかりぬへかれた、さはかりの御けしき【29才】にてその夜のめいほくはかきりなかりきかし中／なる事いひいて、うへもあされたりとそおほざれんか／すならぬものはすき／しきことこのまでさり／ぬへからんかけのこくさの露よりほかにしる人もなき／などをたつねいて、よすかともなれかしさらすは又／いく世もあるましからん世にはたしなからんよしかし／とてなみたくみ給へるをは、宮御覽して御かほの／いろもたかひてたはふれにもゆ、しきことなの給／ひそいみしき事なりともわか御心にこそあらぬも／のうくおほえ給はんをあなかちにもなにかはまいて／は、宮のさの給はんにはあるまじきことにこそは一日三／位の物かたりせしつゝてに笛の音のめてたかりしに【30才】めて、二の宮のことをほのめかししはいか、思ふらんこの／ころさかりにおかしけにおはするを行すゑのたのもし／人にゆつらんなどうへの、給はせけるとかたりしは

／かたしけなくき、すくしてやとこそありしかとの／給かくたにの給は、いか、はせんとうちなけかれて／たち給ぬ

二十一 参内の途中、蓬が門の女を気にかける

くれぬれはうちへまいり給つゝてにまこと／かのよもきかもとはいつれそとはせ給へは見をき／しすいしんこ、もとに侍るそこと申さふらひしかは／又の日み給へしはおろしこめて人もさふらはさり／しあやしさにかたはらの人にとひさふらひしかはつ／くしへまかりにけるなかとのかみといふ人のいゑにさふ／らひけりめのはらからともなむ宮つかへ人にてあま【30才】たさふらふなる申務の宮の姫君のめのとにても侍／なりと申せはさやうのもののきあつまりたるおりの／しわざにや少将のめのと、かやいひて大納言の五節／にいたりしされものにやとおほしやらる、

二十二 中宮の里下がり

中宮いて／させ給ぬれは御こさへうちくし奉らせ給ていとおほ／やけしきくら／しき御ありさまなりうちの御／つかひ日ことまにりなどして殿もかゝるほとはこな／たかちこそおはします宮の御ありさまかたちなど／あらまほしうけたかうはつかしけにてもし給おほき／おと、の御かたはなかのこのかみにてもとかしはにおは／すれとかゝるあつかひくさももち給はねはにや我御／ありさまひとつをはなやかにいまめかしうもてない給【31才】て我はとほこりにをしたちたる御心をきてにそ

／おはしける人よりはいかでともていてたる御ものこ／のみな
としていとわら、かに人にくからぬ御心をき／てなるへしかく
さま／＼にもてかしたつき給御さまと／もをそあけくれうらやま
しうおほしたる

二十三 東宮との睦び

中将の君は／ありしむろのやしまの、ち宮のこよなくふしめに
な／り給へるもいとつらう心うきにいかにせましとのみ／なけ
きまさるをわか心にもなくさめ侘給てをの／つからもやまさる
、としのひありきともにご、／ろいれ給へとほのかなりし御手
あたりにける物のな／きにやはすて山にのみそおほさる、春
宮に／まいら給へれはいりぬるいそなるか心うき事とそう【31
ウ】らみさせ給へはみたり心ちれいならすのみ待てあつき／程
はいと、宮つかへをこたり侍るなりとけいし給へは／なに心ち
にかつねにあしかるへきそ思ひ給事そあ／らん我にはへたてす
の給へとちかうむつれか、らせ／給へは心ちのあしかるはかり
はなに事をか思ひ侍らむ／これ御覽せよかくやせ侍るはしぬへ
きなめりとて／さしいて給へるかひななどのしろくうつくしけ
なるさま／女もえか、らしかしと見え給源氏宮はかくやおほす
／らんとあちきなくよそへられ給てせちにひきよせ／させ給を
あなむつかしあつく侍るにとひこしり給へる／御あはひいとお
かしかくやせそなはるはかり思ふらんこ／とこそ心えたれな
かすみの侍従かまねし給へるな【32オ】めりな人もさそかたり
しおと、もか、れはつれなきな／めりと今こそ思ひあはせらる

れとまめやかにの給は／するを人のとふまてなりにけるよとい
と、くるしけ／れとつれなきさまにてさらぬすき／＼しさをた
に／このみ侍らぬになとありかたき恋の山にしもま／とひ侍ら
んと猶ことすくな、るけしきやしるからん／あなうたてであるや
う有へしとの給はするも御心な／らひなめりとてうちはらひ給
／□□我心しとろもとろになりけり袖より外に／涙もるま
てとぞ思ひつ、けらる、心ならひはけにさ／もやあらんまこと
ならぬいもうとをもたらねはなと／いひたはふれさせ給て宣耀
殿にわたらせ給ひ【32ウ】ぬれはこよひはかひあるましきなめ
りとすさまじう／てまかて給ぬ

二十四 飛鳥井女君との出会い―不審な女車―

たそかれときの程に二条大宮の／ほとにあひたる女車うしのひ
きかへなどとしてとをき／所にかへるとみゆるに物見すこしあき
たるより／まろかしらのふとみゆるはこの御くるまをみるなる
へ／しはやくやりすきぬるをあやしひかめかとおほす程／にと
もなるわらはへのもたるものやしるからんこの御／ともの人み
つけてかや／＼とをひと、むるにえにけ／てひきと、められぬ
みすいしんのいたうとかめか、／りてしたすたれかけ給へるは
やんことなき僧にこ／そはおはすらめさはありともしはしをし
と、めてあや／にくにやりちかふるはたそ／＼とあら、かにと
へは【33オ】仁和寺のなにかしあさりの御車にては、うへの物
にこ／もりいて給なりとわな、きいふわらはのあれはいてさ／
はあまきみかみんとてすたれをひきあくるにほうし／はしりお

りてかほをかくしてにくるをこのあま君／はなとにくるそとを
ひてはしりの、しるを御車／をと、めてかくなせそとせいせさ
せ給へはうしかひわ／らはをとらへてなにものそ／ととへは
仁和寺にな／にかし威儀師と申人なりとし比けさうし給へる人
の／うつまさに日比こもり給へるかいて給をぬすみいて給ふ／
なりほうしたてらかくあなかなるわさをし給へは佛／のにく
み給てか、るめをみせさせ給なりかしをしと、め／てしめやか
にもやらせ給はてとし比の思ひかなひて【33ウ】いそき給ほと
に女車とそ御らんすらんだ、とくやれと／せめ給へは師にはし
たかへといふ法もんを僧のあたりに／としへ待ぬるしるしにき
、ならひてはしらせ侍つるなり／いまよりはさら／／にこの師
にはしたかひつかはれし／とおとろしうかなしと思ひたるおか
しうなりてゆるして／けり

二十五 飛鳥井女君との出会い―随身の報告を聴く狭衣―

君にしか／／なん申つる車にはまことに女のおはす／るなめり
人はみなにけ侍ぬかくてうちすて、はいと／をしようこそ侍けれ
と申せはなにしにか、るわさをしつる／つねにせいする事をき
かていくらん所はいつこにかあ／らんいてかさてはすてんその
わらはにとひてをくれと／の給へはまかりつらんかたもしり侍
らすいまさりと／くるまとりにありつる法師まうてきなんこ
のわたり【34オ】にかくれてそさふらん御たいまつまいら
てくらふ／なり侍ぬとて御車つかまつれといへとぬすまれた／

らんはいかやうなる人ならん心ならぬ事ならはいかばかり／わ
ひしかるらんくらきみちの空にさへさすらふよかくて／すて、
はありつる法師ほいのま、にやゐてゆかんさら／ぬにてもこよ
ひかくてあらはいかなる心ちせむなとおほ／すにいとをしけれ
はをくるへき所もしらすこよひは／かりはとのへやゐてゆかま
しとおほすもけさうちか／つきてはしりつるあしもとおほしい
つるもおかしくみちの／ほとてやふれ侍らんと心つきなくゆ、
しきにあすか／るにやとりとらせんともかたらひにく、おほさ
るれと／なをいかなる人のか、るめはみるそとゆかしければ引
かへし【34ウ】あの車にのりうつりてみ給へはいとた／／し
きほと／なれときぬひきかつきてなきふしたる人ありけり／

二十六 飛鳥井女君との出会い―女君を送り届ける―

あないとをしやかなる人のか、るみちの空にた、よひ給／そい
かなる事ありともひとりうちすて、心うくにけ／ぬる人はつら
くはおほさすやよし野の山にとはおもは／さりけるにこそみす
て、まかりなはこよひいますこし／おそろしき事も有なん又あ
りつるかしらつきも／まろいぬとみわきもこそすれまことに御
心ならて／か、ること物し給ならはおほし所をしへ給へをくり
聞えん／猶ほいもありあの人とわたらんとおほさはまかりなん
／との給こゑけはひのき、ならはすあてにめてたきは／かはか
りにやと見え給をたれにかとおほえなくはつかし【35オ】けれ
とかくの給にきこえずはけにすて、こそおほせめ／さらはあり
つるゆ、しき物のきてゐてゆかんこと、思ふに／／かなしければ

の／＼おほゆるま、にきこえんとおもへたと、／＼わな、かれて
とみにもひひいてられすた、なきに／＼のみなきまざる、け
はひなどよそにて思ひつるより／＼はあてにらうたければくるし
うなりてさらはまかりぬへ／＼きなめりな御心ならぬ事とき、つ
れはさもやといと／＼をしきになんかななき給このわたりにこ
そのす／＼らんよもみすて聞えしとけしきをみるとの給へは
／＼おはしぬへきなめりといとわひしきにいひいてん所の／＼さま
のはつかし又又はか／＼しうもおほえぬになきこゑは／＼まして
いとわりなけれとほりかはといつことかや大納言【35ウ】とき
こゆる人のむかひに竹おほかる所とおほゆるを／＼さていかに
といふけはひいとらうたけにみまさり／＼しぬへき人にやとこよ
なく心とまりていき所をとひ聞／＼き、てをくらんとおほしつれ
と心やすけなる里のわたり／＼とき、給もやうかはりて中／＼ゆ
かしければみをかまほ／＼しくやおほすらんおり給はてやかてを
しあてにおはし／＼ぬ

二十七 飛鳥井女君との出会い—女君の家に着く—

ほり河のおもてにはしとみなか／＼として入かと／＼いふせくあ
つけなる所なりけりとをしのひやかにた、／＼けは人いてきてと
ふなりけりさていか、いふへきと／＼とひ給へはなくよりほかの
ことなくてものいはねはをし／＼あてにうつまさよりいてさせ
給へるといはせ給へれば／＼いま、ていてさせ給はずとおほつ
かなからせ給へるとて【36オ】あけたればかやり火さへけふり
てわりなけなり／＼□□□わか心かねて空にやみちぬらん行かた

しらぬ／＼やとのかやり火との給けはひやう／＼ものおほえ行ま
、に／＼めてたくはつかしけなるにおほえなくあさましきあ
りさまをみ給ふもたれにかあらんいかにしてもあり／＼つるもの
にみえしと思ひつるま、にかゝるふせ屋のしたを／＼さへをしへ
たてまつるもいかにおほすらんいまそあ／＼さましくはつかしき
つまとなるへし人あけてこ、にと／＼いへは車さしよせたるに五
十はかりなるおもとのしな／＼しなしからぬさましたる火をいと
あかうともしていと／＼をそくおはしましつる御車のをそかりつ
るかたいふの／＼君やまいり給へるとてよりきたるほかけすかた
の【36ウ】みしらすあやしきもうとましくおほえ給ておほえな
き／＼人きたりとてうちもこそすれとくおり給へとておろし／＼給
へと火さへあかくてかたはらいたくわりなきにとみに／＼うこか
れぬをひきをこし給へればきぬなといとあさやか／＼ならぬうす
いろのなよ、かなるにかみはつや／＼と、か、り／＼ていとわりな
くはつかしと思ひたるけしきとなへて／＼のさまにはあらずた
、いとおかしき人さまにそ有ける／＼

二十八 狭衣、飛鳥井女君と契る

あやしう思ひのほかなるわさかなたれならん見てやみ／＼なまし
かはいかにくちおしからましと思ふ物からさるへ／＼きにやか、
るうち心なとなかりつるものをいてやうとま／＼しかりつるかし
らつきになれつらんかしと思へは猶心つき／＼なれとか、るみ
ちゆき人ををろかにはえおほし【37オ】すてしなありつる人に
思ひをとし給なよとの給に／＼いとつかしうておりなむとすれ

はひかへてなといらへ／をたにし給はぬみちのしるへをうれしとおほさましか／はとまれとはの給なましあな心うとゆるし給はねは／□□□とまれともえこそいはれねあすかゝにやとりはつへきかけしみえねはといふさまぞ猶その水かけ見／てはやむましくおほされける／□□□飛鳥井にかけみまほしきやとりしてみまくさ／かくれ人やとかめん車まつ程人にみせてをき給へよ／とており給ぬるをあなくるしひんなき物をとくるしけ／に思ひたれとまことに御車のをくれたりけるまち給／とてやかにさしいてたり女いとほしたなしと思ひたる／ものからいたくきえいりたる物はちにはあらずた、いと／なつかしうおかしきさまのもてなしなどあやしきまで／らうたけなりいゑの人さいかなる事そとあやしかり／たちさはきたり御車ゐてまいりたるにやとき、給へ／とかはかりにてたちいつへき心ちもし給はねはあり／つるいのりのしやいりこんと物おそろしなからとかくか／たらひ給女たれともたにしらぬをわりなしと思ひ／たり君はおもはずなりけるちきりのほともあさか／らすあはれにおほさる、事かきりなし物きたなく／うたかはしかりつるいのりの師の心きよさもみあらは／して我すくせのありてさる心もつきけるにやと【38才】まであさからすおほさるかねていみしう心をつくし／やむことなきあたりよりはならぬ草の枕もめつら／敷てその、ちはよひあかつきの露けさもしらす／かほにまきれありき給よなく／おほくつもりに／けり

二十九 飛鳥井女君の素性

この女はそつの中納言といひける人のむす／めなりけりおやたちみなうせにければめのとのかすへ／のかみなといふもの、めてなまどくありけるを／おとこうせてのちはいとわりなきありさまにてす／くしければこの仁和寺のいのりの師をかたらひて／これにこのきみの事をもしりあつかはせければおほ／けなき心有ける物にて人しれす思ふ心つきてか、／るわざをしたるなり車なども又か、る人なくてうつ【38才】まさにゆき、のたよりをよるこひてぬすみもて行／なりけりありつるうしかひそこにきてもかたりければ／いとあさましかりけることかなたれといふ人さるわざを／し給つらんわか君いかになり給つらんいきてみよなど／いひしのちいきしはをともせねはことほりにいとおしう／て人やりたれば返しをたにせねは思ひなけく事／かきりなしこの人かくてやみ侍なは御まへの御あつかひ／もいかてかはし侍らんゆ、しきわさかなはやく源氏／宮のうちまいりとしてやむことなき人とのまいりつと／ひ給なるにまいり給ひねをのれはいつちもく／まか／りなんこのおほする人はたれそとよあやしきいたう／忍ひ給へはおまへにはしらせ給へりやといへはしらす萬【39才】た、心よりほかにあさましきありさまなれはとて／うちなき給をさすかにあはれとみて我もうちなき／ぬ又ある人ひとひも御かとをむこにた、かせ給ひ／しにあくる人もなかりしかはおはしますをいとひ／まいらするかへたう殿の御ことはしらぬかいたうあ／なつり奉らはかとおきなどい

てきてこのかとあけ／させんなどいひければ少将殿こそおはす
なれといへ／はまれ／ある女ともこの比はおちてまうてこそす
／いとそわりなきやあてにやんことなくめてたしと／ても此君
にてはいか、はせんとしおひて侍れば行／すゑのことも思ひ侍
らすあつまのかたへ人のさそ／ひ侍にやまかりなましと思ひ侍
をたれに見ゆ【39ウ】つりてかと思ふもほたしにてそおはしま
すやといへはう／ちなきてたれをたのみてかはいつくなりとも
おはせん／ところへこそはとの給も哀に心くるしければまことに
／しる人もなくたよりもなきに思ひわひてみちのく／にお
くのさうくんといふ物のめになりてやいなまし／と思ふなりけ
り

三十 狭衣、飛鳥井女君のもとに通う

君はみなれ給ま、にあはれさまさ／りつ、なをさりにはあらず
ちきりかたらひ給ぬへし／さるはこれにおとるへき人もみ給は
す我御心もすく／れてこの事のめてたしなとわざと御心とまり
ぬへ／きゆへもなけれとた、す、ろにみてはえあるましう／い
とおしく心にか、らぬひまなくわれなから物くるは／しきまで
におほゆるをこれにけにすくせといふ【40オ】ものならんかく
のみおほえはくちをしょうもあるへきかなと／ひにそへてえざり
かたうあさからすのみおほえ給へは／またる、よなく／もなく
まきれありき給事月比／にもなりぬ御ともの人さまたか、る
事はなかり／つるものをいかはかりなる吉祥天女ならんさるは
いと／物けなきけしきなるをとをの／いひあはすへし／

三十一 飛鳥井女君の乳母、陸奥下向を決める

かくいふ程にこのめのといてたちいとすかやかなるけ／しきに
てみをき奉るへきにもあらずさりとて又／か、る人さへおはし
ますあれはいかてかかくし奉らんいか／にしてすこし給はんと
すらんといひつ、けてうちひ／そみなくをしはしのほとたにお
はせざらん世には／有へき心ちもせぬをましていつをかきりに
かと、め【40ウ】をかんとは思ひ給ふらんかくよるつに所せき
身をいか／にもうしなひてこそいつくへもなといひもやらす心
く／るしけなるけしきなればさらはいてたち給へきにこそ／あ
なれ御心さしありけなる人を見すて奉り給て／あさましき有さ
まにひきくせられ給はんもいとあるま／しき事と思給ふれとか
くの給はすればなとさすか／にことほりを返／いひしらせつ
、た、いてたちにて／たつをみるにさらはいまいくかにこそ
など人しれす／かそへらる、にいと心ほそけれとたれとたにし
らせ給／はぬけしきもさすかにたのみかくへき（く）もあらぬ
に／かくこそなとほのめかし聞えんも御心うちをしらねは／つ
、ましくてなにとなく思ひみたれたるけしきなる【41オ】をな
をかくおほつかなきありさまのたのみかたくらき／にやと心
くるしけれと又我ゆくゑをもあまのことたに／なのらねは心く
らへにてた、あはれとおもほえ給ま、に／いひなくさめつ、こ
の世ならぬちきりをそかはし給ける／か、る程に夏もすき秋に
も成ぬ【了】

付記

本翻刻は科学研究費助成事業「狭衣物語諸本研究―三条西家本を軸にして―」（基盤研究（C）15K02224／研究代表者：神田龍身）による成果の一部である。